

2018年
11月20日
火曜日

大高 博美 教授(言語学)

他人の視点にも立ちつゝみる 必要性

本日の講話では、人に良かれと思つて実践する企画・発案の難しさについて話します。結論を先に言うと、「人間」としての思慮を欠いた企画は結果的に大不評を買つてしまうこともあるので、そうならないように私たちは常日頃から自身の人間性に磨きをかけなくてはならないということとです。つまり、ここで必要なことは、他人の視点にも立つて眺め直すという習慣です。

北九州市にあるテーマパーク『スペースワールド』は、2017年度をもって営業を停止しましたが、その1年前に奇抜な企画を実践しました。「氷の水族館」と銘打ち、スケートリンクでサンマや鯛、キビナゴ、アジ、エビなど25種類の魚5,000匹を氷漬けにしました。足下に氷漬けされた魚を見ながらスケートを楽しむという企画でした。これは、冬

の催し物を決める先の会議で出た「スケートリンクを海のようにして、その上を滑って楽しんでもらう」というアイデアに基づくものでした。

企画の奇抜さは、例年よりも利用者を増やしました。スケートはせず氷漬けされた魚を見るためだけに来園した利用客もいたほどで、特に子供たちには大好評でした。魚を指差して大喜びして、ご満悦だったそうです。そんなわけで、当初は、特に批判的な反応はありませんでした。

しかし間もなくして様相が変わります。山口県の民放ローカル番組で「氷の水族館」が紹介されると、ネットやSNSで批判が殺到したのです。「残酷だ」「命を粗末にするものではない」「食べ物で遊ぶな」などです。中には「日本の恥」といったものまでありました。この突如の「炎

上」に、営業の総支配人はその夜のうちに企画の中止を決めました。

この企画の何が問題だったかを的確に理論的に説明できる人はいるでしょうか。残酷だからというなら、昆虫採集の標本はどうでしょう？ 私たちは動物をペットと称し監禁するし、オシャレのために毛皮を纏ったり、生活のためとして革で靴やカバンを作ります。何よりも、毎日膨大な量の動物性食品を無駄にしているではありませんか。このような状況ではありませんか。このような状況で、誰がスペースワールドに「魚がかわいそうじゃないか」と言えるのでしょうか？

では、なぜ多くの人がこの一件から不快を感じ取ったのでしょうか？ 鹿児島大学総合研究博物館長の本村浩之教授(魚類分類学)は、「死んだ魚の上を滑るといふ冒瀆的な行為に多くの人が違和感を感じたのだろ

う」と分析しています。私も同感で、理解への鍵となるのは「冒瀆」です。たとえ魚の死骸でも、さらにその上に氷が張られていたとしても、私たちの倫理観では、死骸を跨いだり死骸を踏みつけることは許し難いのです。

この一件は、日本史における踏み絵を思い出させてくれます。私たちは、キリスト教徒にイエス・キリストや聖母マリアの絵を踏ませるといふ行為がどれほど非道であったかを知っています。だから魚を氷漬けにしたスケートリンクから多くの人が嫌悪感を抱いたのかもしれない。人を楽しませよう、喜ばせようとする意図に基づく企画は、勿論、価値のある賞賛されるべき行為です。しかし重要なことは、それは人間としての思慮を欠いたものであってはいけないということです。■